

富來隆先生を偲ぶ

豊田寛 三

昭和四九年四月、大分大学に赴任するとき大分大学の教員でお名前を存じ上げていたのは、渡辺澄夫先生と富來隆先生のお二人だけだった。渡辺先生は言わずと知れた中世莊園史の研究者としてであり、一方富來先生は邪馬台国宇佐説の研究者としてであった。だから、富來先生は歴史(日本史)の先生だと思っていた。着任前に宿舎探しに大分に初めて来たとき、出迎えてくださった渡辺先生との会話の中で、富來先生のこと話題になった。渡辺先生から「富來さんは社会学を担当している」とお聞きし、びっくりしたことを思い出す。

着任後、研究室を訪問してごあいさつをした。その後研究室が二階(富來先生)と四階(小生)に別れていたこともあって日常にお話しすることはあまりなかったが、階段で一時間以上お話ししたこともあった。『大分の歴史』や『大分県史』の編集委員会でしばしば同席し、近現代史を担当された富來先生の発想の豊かさに敬服させられること暫しであった。『大分県地方史』の事務局をお預かりして、バックナンバーをくくっているときにも、考古学から古代・中世・近世・近現代史に及ぶ富來先生の業績を知り、守備範囲の広さと学識の深さを改めて実感したものである。

日本学術会議の会合が大分大学であったとき、永原慶二氏が会員を代表しておみえになったことがあった。富來先生のお姿を見た永原氏が、冒頭で東大史料編纂所での富來先生のことを話された。会合が終わった後、なつかしそうに談笑していたお二人の姿はいまも思い出す。

大病をされて以降、健康には特に留意されており、公職も退かれ、いろいろな会合に出席されることは少なかった。それでも一番うれしそうにされていたのは、佐藤節氏、河野昭夫氏が企画され、多くの教え子・知人が参会した叙勲記念祝賀会であった。奥様と並んで、てれくさそうに謝辞を述べられた先生のほんとうにこやかな笑顔が今も強く残っている。